

石川県白山自然保護センター編集

# はくさん

第13巻 第3号



## 手取溪谷綿ヶ滝

手取溪谷は手取川中流域の鳥越村字河原山から同村字釜清水までの約8キロにわたる区間を称し、兩岸に高さ20~30メートルの絶壁が続き回廊状の谷になっています。ここは獅子吼高原などとともに昭和42年獅子吼・手取県立自然公園に指定されました。古くは、14世紀に大智禅師によって吉野十景の一つとして選ばれ、江戸時代中期には幾冊かの絵本で紹介され、賑わったといわれます。近年、綿ヶ滝周辺がいこいの森として整備され、また昭和60年夏からは鳥越村字河原山からのボートくだりで溪谷内も楽しめるようになりました。



●  
松山利夫

## ■生活のなかの自然

「みどり」ともっとも濃密にかかわってきたのは、農・山村に暮らした人びとでした。この人たちは、「みどり」のなかから実に多様な資源を開発してきたのです。そのひとつは、「みどり」の山野に求めたワラビ・ゼンマイ・ウドなどの山菜を食用に供してきたことです。さらに、植物の生態をよくわきまえ、その特徴を知りつくしていた農・山村の人びとは、「みどり」の山野に求めた素材でかごづくり、燈火にし、薬・染料に用い、甘味料や洗髪洗剤さえつくりだしていたのです。

しかし、こうした生活のすべての分野にまたがるような、「みどり」との全面的なつきあい方は、近年、急速に失われていきました。ここでもう一度、かつての農・山村にみられたつきあいのあり方を見なおすのも、意味のないことではないでしょうか。なぜなら、今日の都市居住者の大部分は、10数年～20年以前には、農・山村に暮らしていた人たちだからです。それゆえ、現在の都市に住む人びとの多くは、「ウサギ追いしかの山、小ブナ釣りしかの川」といった叙情的自然観をもつのではないのでしょうか。そうであってみれば、もう一度、かつての「みどり」とのつきあい方をおもいうかべて、これからを考える素材にしたいと思うのは、私一人ではないでしょう。

## ■数多くの山菜

そこで、そうした素材を、野生の食用植物に求めてみましょう。食糧の獲得は、私たちが生きることの、もっとも根源的な問題だからです。

かつて、といっても昭和40年代の後半、白山麓での私の調査では、30種(species)の野生植物が食用に供されていました(表1)。しかも、そのほとんどが二次林の産物であることは、注目されます。二次林は、実は大変ゆたかな資源をもっているのです。その二次林の産物をみますと、もっとも多いのが、いわゆる山菜として、茎や葉を供するもので、18種あります。その他には、種子や鱗茎に貯えられたデンプン質の採集を目的とするもの、つまり主食糧になりうる植物が8種、油脂植物2種などがあります。こうしてみますと、数のうえでは、二次林がもたらす植物は、山菜が圧倒的です。そのほとんどは、雪どけから田植えごろまでの間に、各家ごとに自由に採集してきました。これに対して、主食糧になり得る植物と油脂植物の採集は、秋に集中します。その中心は、クリ・ドングリ類やトチの実です。これにクズやヤマノイモが加わります。

第1表 採集の対象とされてきた植物

地方名*	和名	学名
ババユリ	ウバユリ	<i>Cardiocrinum cordatum</i>
カタクリ	カタクリ	<i>Erythronium japonicum</i>
◎ヤマカンビョウ	オオバギボウシ	<i>Hosta sieboldiana</i>
◎アサツキ	アサツキ	<i>Allium schoenoprasum</i>
キノシタ	モミジガサ	<i>Cacalia delphinifolia</i>
◎フキ	フキ	<i>Petasites japonicus</i>
◎モチグサ	ヨモギ	<i>Artemisia vulgaris</i> L. var. <i>indica</i>
ヤジロウ	オヤマボクチ	<i>Synurus pungens</i>
カタハ	ウワバミソウ	<i>Elatostema involcratum</i>
オロ	アカソ	<i>Boehmeria tricuspis</i>
◎イラ	ミヤマイラクサ	<i>Sceptrocnide macrostachya</i>
クズフジ	クズ	<i>Pueraria thunbergiana</i>
ドングリ	ナラ類	<i>Quercus</i> spp.
ブナ	ブナ	<i>Fagus crenata</i>
◎クリ	クリ	<i>Castanea crenata</i>
◎トチ	トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i>
ガイヤ	カヤ	<i>Cephalotaxus</i> spp.
イチイ	イチイ	<i>Taxus cuspidata</i>
◎クルミ	オニグルミ	<i>Juglans mandschurica</i> var. <i>sieboldiana</i>
リョウボ	リョウボ	<i>Clethra barbinervis</i>
ソバナ	ソバナ	<i>Adenophora remotiflora</i>
ママコ	ハナイカダ	<i>Helwingia japonica</i>
◎ワラビ	ワラビ	<i>Pteridium aquilinum</i>
◎ゼンマイ	ゼンマイ	<i>Osmunda japonica</i>
イタドリ	イタドリ	<i>Polygonum cuspidatum</i>
◎ウド	ウド	<i>Aralia cordata</i>
◎ボウダ	タラノキ	<i>Aralia elata</i>
◎クダマ	クサソテツ	<i>Matteuccia struthiopteris</i>
ヤマノイモ	ヤマノイモ	<i>Dioscorea japonica</i>
◎アザミ	アザミ	<i>Cirsium</i> spp.

学名は牧野富太郎『牧野新日本植物図鑑』(1973)による。

\* 地方名が2つ以上ある場合も1つに限った。

◎印は現在もかなりの頻度で採集・利用されるものを示す。



地方名クグミ 和名クサソテツ



カタクリ

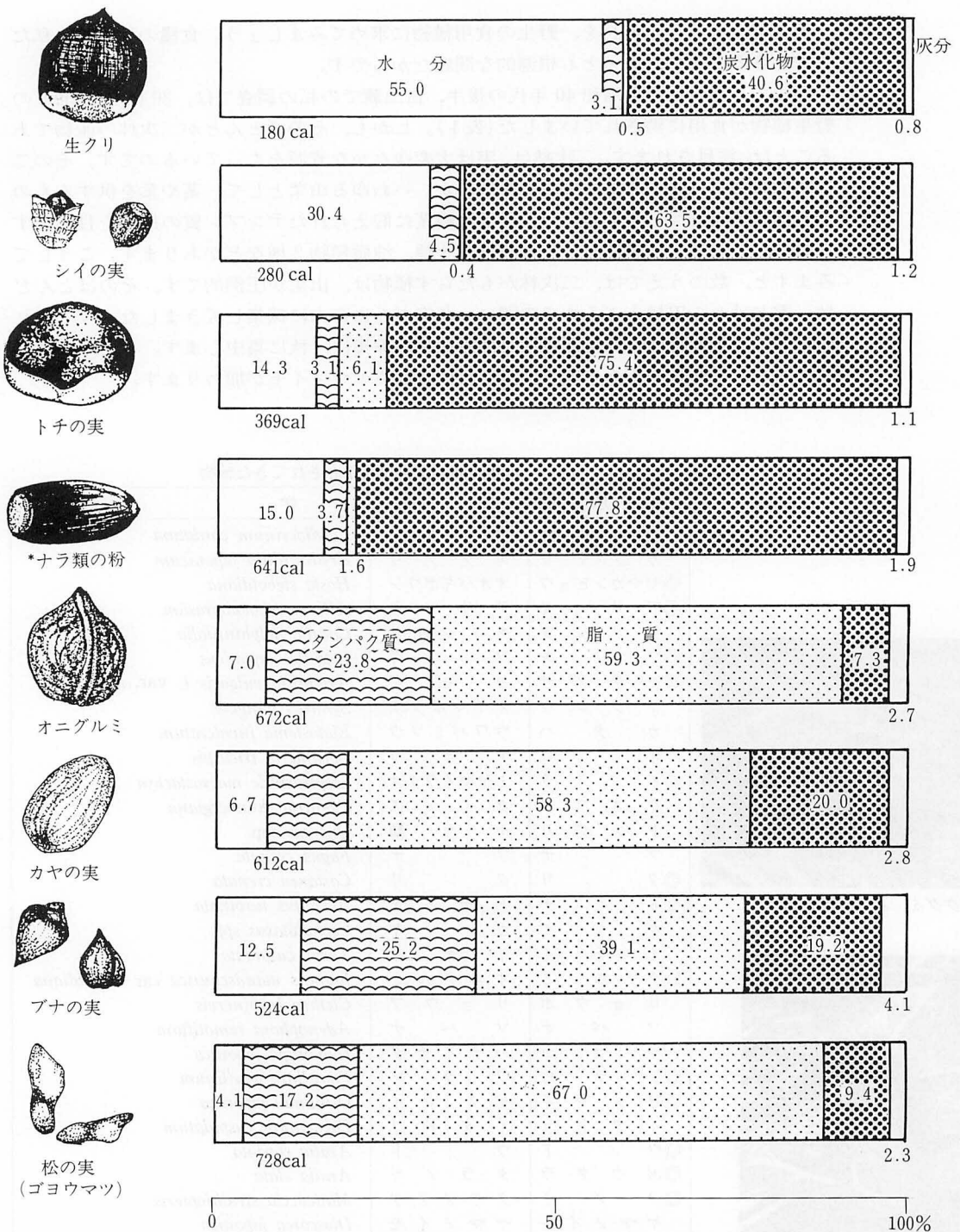


図1 木の実の栄養成分 (100gあたり%)

菅原 (1972) による。

\*印は灰汁で煮たあとと水洗したものの成分値。炭水化物には粗デンプン・繊維を含む。

## ■とちの実とドングリを食べる

デンプン質を大量に貯えるクズとヤマノイモが主食糧になり得ることは、容易にわかります。しかし、洗くて食べられないとされるドングリ類やトチの実が、主食糧になることについては、少し説明があるでしょう。

そこで、これらの木の実の栄養成分をみてみますと(図1)、ドングリ類では100グラムあたり50%以上のデンプン質が含まれていることがわかります。それにわずかですが、タンパク質や脂質も含んでいます。トチの実にいたっては、デンプン質の含有率が75%にも達し、同様にごくわずかのタンパク質と脂質が認められます。したがって、これらの木の実は、コメにくらべると味はだいぶ劣るでしょうが、主食糧としての食品に必要な栄養素を一応もっていることになります。

しかし、これだけではドングリ類やトチの実が、主食糧にできることにはなりません。主食糧というからには、なによりも大量に集めることが必要ですし、それに劣らず重要なことはドングリ類やトチの実から渋味を取りのぞき、デンプン質だけを取り出す、複雑で高度な技術が必要だからです。つぎに、これらの木の実を主食糧にするには、どれくらいの量をあつめればよいのか。また、その採集に農・山村ではどのような慣習を育んできたのかを検討してみましょう。

まず、集める量です。ごく簡単な計算をしてみます。いま、成人1人当たり1日に必要な熱量を1800カロリーとおき、ドングリ類だけを食べると仮定します。さらに、洗ぬきの過程でドングリ類は、容量の1/2が失われるとします。そうしますと、成人1人当たり1日に少なくとも1.5kg、容量に換算してざっと3升は必要です。1年間では11石にもなります。精白したコメですと、どんなに多くても1日5合、年間2石もあれば十分ですから、ドングリ類はあまり効率のいい食糧でないことだけはたしかです。

一方、ドングリ類を拾える期間は、私たちの実験では、約100日間です。その間に11石を集めるには、1日に1斗は採集しなければなりません。仮に1日当たり5升しか拾えないとしても、100日で5石ですから、計算上はドングリ類だけで、半年間の生活ができることとなります。トチの実については結果だけを申しますと、年間6石あれば、成人1人の年間の必要エネルギーを満すこととなります。

こうして見てみますと、これらの木の実を主食糧とするには、栄養素のうえでも採集量のうえでも、おおきな問題はなさそうです。つまり、これらの木の実は、非常にすぐれた野生の主食糧なのです。それだけに、かつての農・山村では、これらの木の実の採集には、さまざまな慣習を生んできたのです。そのひとつに、共同採集があります。これは、採集日時と場所をあらかじめ決めておき、当日、村中の人たちがこぞって木の実ひろいをするものです。そして、拾った実を参加者全員で平等に配分してきました。そ

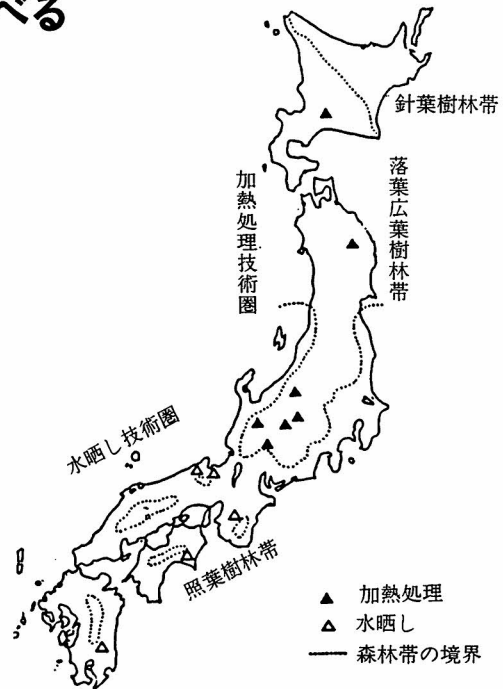


図2 ドングリ加工技術の分布

うした例はトチの実を中心に、ドングリ類についても日本各地に認めることができます。また、これらの木の実は「食のなる木」とよばれ、勝手に採集することを禁止した村も数えあげるにいとまがありません。そのほか、「食のなる木」であるトチノキを、嫁がせる娘に、1本もたせる例が中部地方の山村にみられます。これをもらった娘は、秋になるとそこへトチの実ひろいに来て、拾った実を婚家にもちかえてトチモチに加工したのです。この地方では、トチモチが日常の食事はむろん、ハレの日の食べ物でもありました。類例は、ドングリ類にもあります。東北地方の山村では、ナラの木を先祖代々大切に保護し、これから得られるドングリを団子や粥につくって日常の食事に供していました。

しかし、さきにも申しましたように、ドングリ類やトチノミには渋味はあって、とてもそのままでは食べられません。この渋をぬいて、デンプン質だけを取り出すのは、なかなかやっかいです。その方法にはふたつが知られていました。粉に砕いた木の実を水にさらして渋ぬきする水さらしの方法と、あら割りの実を容器に入れて加熱して渋をぬく、加熱処理の方法です。このふたつの方法は、木の実の種類に応じて、つかいわけられていました。水さらしは、アラカシやシラカシなどの照葉樹性のドングリ類の渋ぬきに採用されます。これに対して加熱処理は、ナラのドングリ類とトチノミに使われてきました。このふたつの技法の分布は、日本列島の森林帯区分とみごとな対応を示しています(図2)。これは、木の実の食用化の技術が、日本列島の生態系と非常に深くかかわっていることを示しています。

## ■大切な雑木林

このように、農・山村に暮らした人びとの生活技術は、自然生態系つまり「みどり」とのかかわりのなかから展開してきたわけです。ここでは詳しい紹介を省きましたが、冒頭に申しました燈火や甘味料、洗髪洗剤などについても同じです。洗髪洗剤を例にとりますと、北海道ではノリウツギの樹皮を、東北地方ではサイカチのさやを、飛騨地方ではエゴノキの果実を、そして南九州ではムクロジの種皮(仮種皮)を用いてきました。日本列島に暮らす人びとは、生活のいろんな分野にわたって、「みどり」をきめこまかく利用してきたのです。

さて、このようにみえますと、20年ほど前まで私たちは、主食糧となった木の実をはじめ、実に多様な植物を、さまざまな生活の側面に登場させてきたことがわかります。

その植物をよくみますと、山菜であれ、木の実であれ、あるいは、かごや洗剤であれ、多くが人手の加わった二次林の植物であることです。「ウサギ追いしかの山」も二次林でした。この二次林は雑木林で、スギやヒノキの造林地では、もちろんありません。これからの「みどり」を考えると、私たちに多くの恵みをもたらしたのが造林地でも原生林でもなく、二次林だったことは、あらためて確認しておく必要があるかと思えます。

(国立民族学博物館)



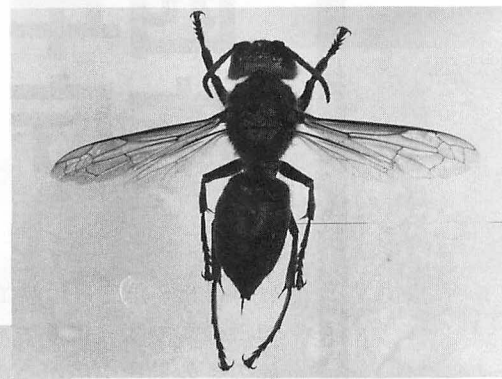
恵み多い二次林

## 乗っ取り屋!

# チャイロスズメバチ

■水野昭憲

1985年夏の暑い日、吉野谷村中宮の草地で生きているバッタの足に咬みついているスズメバチを見かけました。必死にもがいているバッタの後足をバリバリと咬み切ってしまう、持ち去りました。このあたりには“あかばち”と呼ばれるキイロスズメバチは多いのですが、このハチは濃い赤茶色でキイロスズメバチよりやや小型の初めて見るものでした。石川県には未記録のチャイロスズメバチでした。



チャイロスズメバチ

数日後、その近くで同じハチが食物を運んでいるのを見て、その飛んで行く先を追ってみると、ハチは寺の壁板にある節穴へすいこまれていきました。しばらくみていると、チャイロスズメバチが穴から弾丸のように飛び出したり、何かを持って帰って来ては穴のふちに一瞬止っては中へ消えていきました。

スズメバチの専門家である三重大大学の松浦誠さんに問い合せたところ、全国的にも珍しいハチで、これまでに北海道、秋田県、新潟県、東京都、岐阜県、滋賀県などで採集されているものの、巣が発見されたのは数例しかないとのことでした。

ハチは10月に巣を離れたらしく、10月下旬には穴へ出入りするハチは全く見られなくなりました。後日、寺の所有者の了解を得て、

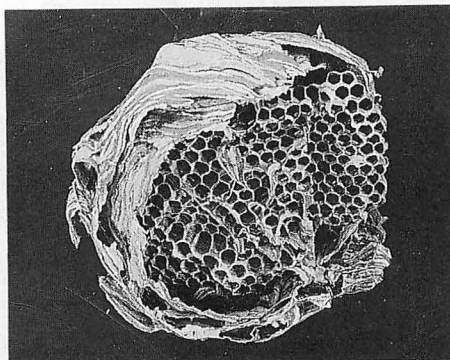
壁板を1枚はがし、板と板の間にはさまるようにはりついていた巣のぬけがらを採集しました。

巣は全体が長径192 mm、短径176 mmの紙状のカバーに包まれていて、中には巣板が2段、大きな下段の板には六角形の美しい275室がありました。巣の下段の板のすき間には、チャイロスズメバチの死体が1つと、食べ残しのバッタ類の足先が多数落ちていました。

このハチは、他種のスズメバチの巣にもぐり込

んで女王を殺し、代って産卵しながら初めのうちはもとの働き蜂に子を育てさせ、やがて巣をのっとり、全てがチャイロスズメバチの集団となります。今回発見した巣は最初キイロスズメバチが造ったものでした。

(白山自然保護センター)



# 四年目を迎えた 本庁舎

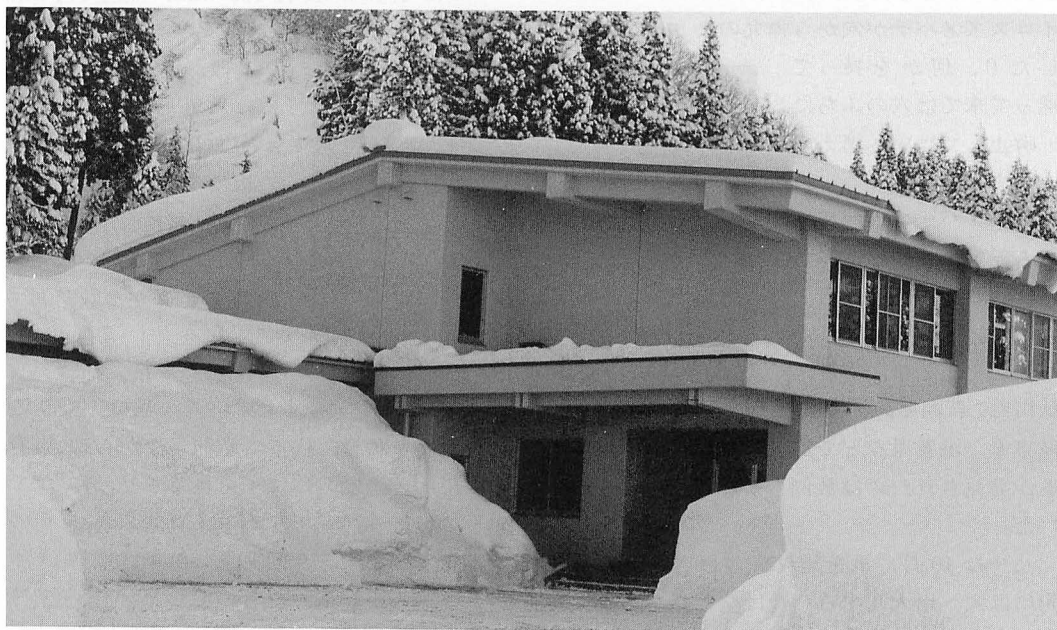
田中 宏明 ■

昭和 58 年 7 月に竣工した新庁舎での活動が始まって 3 度目の冬を迎えました。連日の雪ですっぽりおわれた当センターの窓越しには、今年もまた厳しい白山麓の冬の景色が広がっています。その雪が降り始める少し前、庁舎の山側に、樹木園が完成しました。そこで、これまでに行われてきた当センターの新庁舎整備事業の経過や、一昨年整備した前庭のことを織り混ぜながら、この樹木園について、ご紹介します。

## ■新庁舎建設事業の経過

新庁舎建設事業は昭和 48 年に当センターが設置されて 7 年を経た昭和 55 年に始まりました。その後、全体整備計画に沿って毎年進められてきた事業も、6 年を経た現在ではその大部分が完了しました。

現在までに行われた建設事業の内容は、まず昭和 55 年度の林道オヤマ線(国道 157 号線から当センターへの接続道路)拡幅工事を皮切りに、昭和 56 年度には用地買収、境界杭の設置が行われ、併せて地質調査、建築設計が行われる等、庁舎建築の着工に向けて着々と準備が進められました。



三度目の冬を雪につつまれて迎えた新庁舎



昭和 57 年度にはいると、敷地造成と併行して新庁舎の建築工事が始められ、同時に林道オヤマ線の舗装工事や、電気の引込工事が行われました。

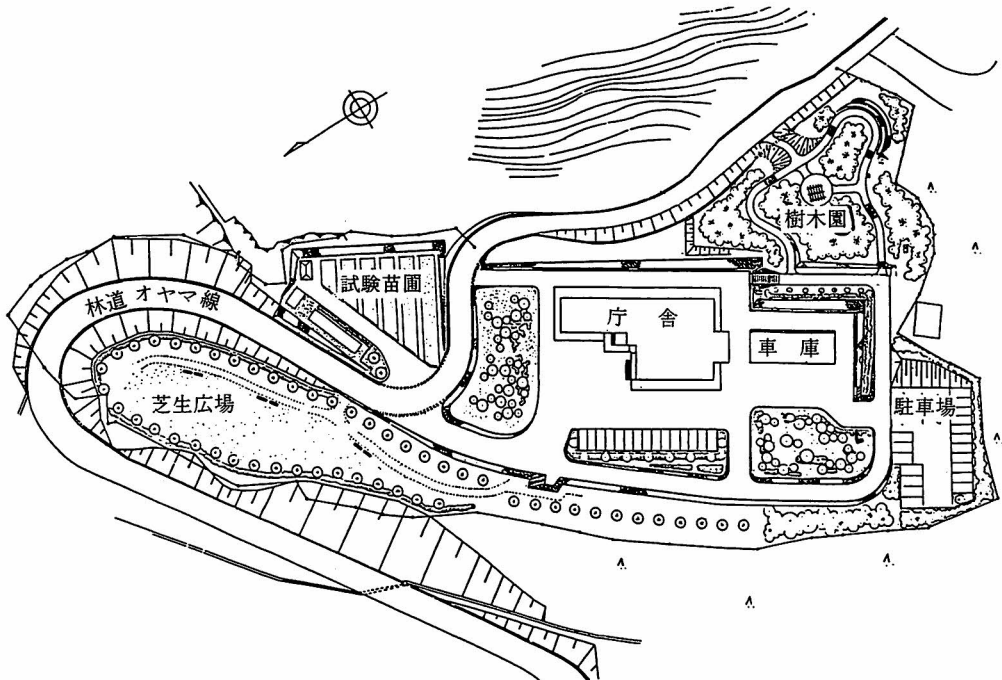
58 年度には庁舎や車庫の建築工事が引続いて進められた他、駐車場の舗装工事も行われ、同年 7 月 2 日には竣工式を迎え、新庁舎での活動が始まりました。また同年秋には、庁舎前庭の修景工事も行いました。

59 年度には、1 年間新庁舎で活動して気付いた不都合な施設等の改良や、擁壁の設置等敷地内の用地保全工事を行ったほか、今年度の樹木園整備の準備として同園に植栽する樹木の山採り工事を行い、昭和 60 年度の樹木園整備に至りました。

## ■ 紆余曲折した周辺設備計画

ところで、このような経過をたどったセンター整備は、はじめから全体計画案のまま進められた訳ではありません。庁舎周辺敷地の有効な利用のしかたをめぐって、これまで幾つもの提案がされ、その度ごとに検討され、修正されて来ました。

たとえば、当初駐車場の外、野外実験観察林や、哺乳類用ゲージの設置、池、修景林が計画されていましたが、その後ブナ等の発芽や生育状況等を試験する実験林、標本や資料等の保管庫整備用地、水生動物の観察や、飼育を行う実験池、さらには地元白山麓地域の地場産業の発展の一助となればとの発想から薬草園等多くの案が出され検討されました。これらの案が最終決定に至るまでには、センターの組織的な問題はもとより、財政、敷地規模、積雪、水源等の条件が検討されました。また新庁舎で実際に活動して気付いた事もあり、同時に最終的な施設の配置案の決定にも影響しました。現在までの最終的な方針として、図のとおり樹木園、駐車場、試験苗圃、芝生広場の各施設の整備が進められています。



白山自然保護センター周辺整備基本計画

## ■前庭について

昭和 58 年度のセンター周辺整備事業で行った前庭の工事について少しご紹介しましょう。

この工事では、白山地域に見られる植生を基本とした植栽計画をたてました。まず、当センターへの導入部であり、修景上の中心となる正面玄関前には、樹高 5～7m のブナを 30 本余り群植し、白山の最も代表的植生景観であるブナ林のイメージを構成しました。

また、事務室の正面の駐車場に沿って、ナナカマドを一行に植えました。昨秋は赤い実をつけ、そばにあるカキの実といっしょに、ヒヨドリやツグミが食べに集まって、私達の目を楽しませてくれました。

車庫前には、トチノキ、キタコブシ等高木類 16 種と、オオカメノキ、ムラサキシキブ等低木類 15 種を通路沿いに植えました。気象観測用に百葉箱や、積雪量の観測用ポールも設置しました。コブシやミズキ、トチノキ、ヤマボウシ等は、植えた翌年には枝葉も少なく、花も咲きませんでした。昨年の春から夏にかけてはようやく花も見せてくれました。今春にはまだ花をつけていないタムシバや、シナノキ等も加わってたくさんの花を見せてくれると期待しています。

## ■樹木園について

今年度整備した樹木園は、前述の前庭と同様、白山地域の植生に基づいたものである事は勿論、前庭が庁舎周辺の、いわゆる修景が目的であったのに対し、樹木園は、当センターの展示施設の一部（屋外展示施設）としての性格付けをさらに加味したものにしました。

### ●樹木園植栽木

(やなぎ科)	タマアジサイ	ソヨゴ	ヤマツツジ
ドロノキ	ノリウツギ	ヒメモチ	(えごのき科)
(くるみ科)	(まんさく科)	(かえで科)	ハクウンボク
オニグルミ	マルバマンサク	イタヤカエデ	(くまつづら科)
(かばのき科)	(ばら科)	コハウチワカエデ	ムラサキシキブ
ヤマハンノキ	ウワミズザクラ	ヤマモミジ	(すいかずら科)
ツノハシバミ	ナナカマド	(とちのき科)	オオカメノキ
(ぶな科)	ヤマブキ	トチノキ	タニウツギ
クリ	(まめ科)	(つばき科)	ヤブデマリ
コナラ	ネムノキ	ナツツバキ	
ブナ	ヤマハギ	ユキツバキ	
ミズナラ	(みかん科)	(うごぎ科)	
(にれ科)	キハダ	タラノキ	
ケヤキ	サンショウ	(みずき科)	
(もくれん科)	ミヤマシキミ	ヒメアオキ	
コブシ	(とうだいぐさ科)	ミズキ	
(くすのき科)	エゾユズリハ	ヤマボウシ	
オオバクロモジ	(うるし科)	(りょうぶ科)	
(ゆきのした科)	ヌルデ	リョウブ	
エゾアジサイ	(もちのき科)	(つつじ科)	

全体としては、丸味を持った柔らかな造成をしたうえで、園路や階段、擁壁等は木や石といった材料を主に用い、周囲の環境に調和するよう整備しました。植栽計画でも、樹高の高低をおりませ、将来、不規則な林冠が形成され、自然的な景観となるよう整備したつもりです。

展示施設の性格上、多種の樹木を植栽した他、特徴の一つとして、生産された造園木を植栽するのではなく、センター周辺で山採りした樹木を使った樹木園をつくりました。

植栽した樹木は別表のとおり44種 223本ですが、今後機会あるごとに増やしたいと思っています。さらに、同園の中央部には、ツル性植物の棚を設置する予定で、今年度は基礎工事を行いました。この棚に這わせる樹種については、まだ決定していませんが、ヤマブドウ、ツルウメモドキ、アケビ等を候補にあげています。

草本類についても、今のところ未整備ですが、今後積極的に植込んで行きたいと考えています。ここでは多様な生息環境の種類を収集する為、樹木の植栽に疎密の変化をもたせ、好陽性、好陰性それぞれの種類に対応できるグラウンドとしています。また、空石積の空間を利用して、岩礫地性の種類についても植込むことを考えています。

この石積は、造成上急斜な所を利用して、山採石（雑割した40～50cm前後のもの）を勾配1割（45°）に張ったもので、石の裏側は細かい砂利と砂で固定して排水性を良くし、目地（石と石の隙間）には通常のもルタルではなく、砂、砂利を充てんして岩礫地性の植物を植込める様に工夫しています。

また、園路沿いの一部を丸太杭で囲み、草本類を播種したり、花の美しさ等、特に間近に観ていただきたいものを植込んだりするスペースとして設けました。

さらに同園には、当初からの周辺整備計画にあがっていた薬草園を、取り込むことも予定しています。

## ■今後の周辺整備について

今後整備して行く予定の施設は、樹木園内のツル植物棚を始め、敷地奥の駐車場、試験苗圃、芝生広場等ですが、駐車場は、今年度の樹木園整備で出た残土によって造成工事が既に完了しています。この駐車場は、今後当センターの活動がさらに活発化し、庁舎内施設のレクチャーホールをフル活用していくうえでも是非整えたい施設です。試験苗圃は、現在林業試験場の苗圃を借りて行っているブナの発芽、生育試験等を始め、草本類を含めたブナ以外の発芽試験、さらには高山植物群落保護事業や、山間部での工事跡地の緑化のための苗木育生等幅広い活用が図れると考えています。

当センターの整備事業（周辺整備を含めて）は、昭和61年度を以て、すべて完了させる予定でしたが、ここ数年来からの緊迫した財政事情の中では、その進捗も思うにまかせない状況が続いています。また、この様な状況下にあって将来必要になる標本や資料類の保管施設の建設も構想の域に留まっています。

今年整備しました樹木園の木々達も、今はすっかり雪に埋もれていて、皆様にごらんいただけるのは、雪融け後になりますが、その頃には、たくましく芽吹いた姿で白山麓のおい春を知らせてくれると期待しています。

（白山自然保護センター）

# 白山蛇谷で集中的に発見 タカチホヘビ



戸田 光彦

蛇の仲間は、人に嫌われることは多くてもまともに興味を持って調べられることはあまりありません。そのため愛好家や研究者も少なく、鳥や獣に比べるとまだまだ未知の分野が多く、これからの研究が待たれるグループです。

## 石川県の蛇

### マムシ

さて、石川県には8種類の蛇が棲んでいます。そのうち最もよく知られていると思われるのが、毒を持つマムシでしょう。北海道、本州、四国、九州などの地域に分布しています。県内でも全域に見られ(島は除く)、たいそう恐れられています。しかし、マムシは大きな蛇ではありませんし、好んで人を咬むこともありません。彼等も毒の無駄使いは避けているのです。病院には血清が用意されているので万一咬まれても、死亡することはまずありません。マムシによる被害者の多くは、捕まえようとして手を咬まれるのです。もし山道で出会ったら、そっとよけて通ればよいでしょう。

### アオダイショウ

また、アオダイショウも有名な蛇です。本州では最大の蛇で、長さは2mを越えます。琉球列島と小笠原を除く日本のほとんどの地域に棲み、主にネズミと小鳥を食べます。人家の屋根裏に住み着いたり、市街地に出現して騒がれたりしますが有益無害な動物なのです。

## マヤカガシ

本州で一番ポピュラーな蛇がヤマカガシです。水田に棲み、主に蛙を食べます。かなり強い毒を持つことが知られていて、咬まれて死亡した人すらいます。毒の注入システムが不完全なのでそう危険ではないのですが、一応注意したい蛇です。

## シマヘビ

シマヘビもまたよく見られる蛇です。アオダイショウに似ていますが、目が赤っぽいことで見分けられます。様々な場所に棲み、蛙、トカゲ、ネズミ、小鳥、魚など様々なものを食べます。無毒ですが性質はかなり荒く、手を出すとよく咬みついてきます。

## ヒバカリ・ジムグリ・シロマダラ・タカチホヘビ

これらの他に石川県には、4種類の蛇が棲んでいます。ヒバカリ、ジムグリ、シロマダラ、そしてタカチホヘビです。ヒバカリは小さな蛇で、70 cm を越えることはないようです。体は茶色で頸の後ろには黄色い模様があります。山沿いの水田などにいて、ミミズやオタマジャクシ、小さな蛙などを餌としています。石川県舳倉島に棲む唯一の蛇とされていますが、水辺のほとんどないこの島でどのような生活をしているのかは不明です。なお、名前の由来は、咬まれるとその日ばかりで死ぬ、という言い伝えによりますが実際は全く無害です。

ジムグリは中型の蛇ですが、その名の通り半地中性であまり人目には触れません。腹の鱗が白黒の市松模様になっているのが最大の特徴です。ハタネズミなどの小哺乳類をもっぱら食べているようです。

シロマダラは 80 cm 以下の小型の蛇で、白地に黒のはっきりしたまだら模様があります。これも気の荒い蛇で、餌は専らトカゲなどの爬虫類です。県内でもあまり見つかっておらず、やや稀とされています。

タカチホヘビは石川県内に生息する 8 種類のヘビのうち最も小さく、長さ 60 cm を越すことはありません。本州、四国、九州、屋久島、種子島の他、中国大陸の東部にも棲んでいます。国内の分布域は広いのですが、未だに見つからない県も多くあります。半地中性で乾燥に弱く、夜行性でミミズなどを食べることで知られています。頭が小さく、頸はほとんどくびれていません。色は背面が茶褐色、腹面は黄褐色をした地味な蛇です。一見ミミズの様ですが、鱗には美しい光沢があります。背中の中正線上に黒い線があることと、尾の下の鱗（尾下板）が対をなさないことで他の蛇と見分けることができます。なお、タカチホの名は発見者の高千穂宜磨氏にちなむとされています。

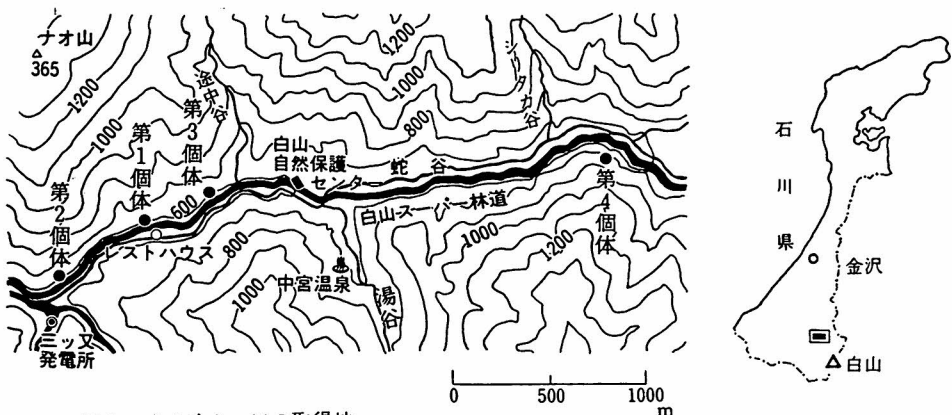
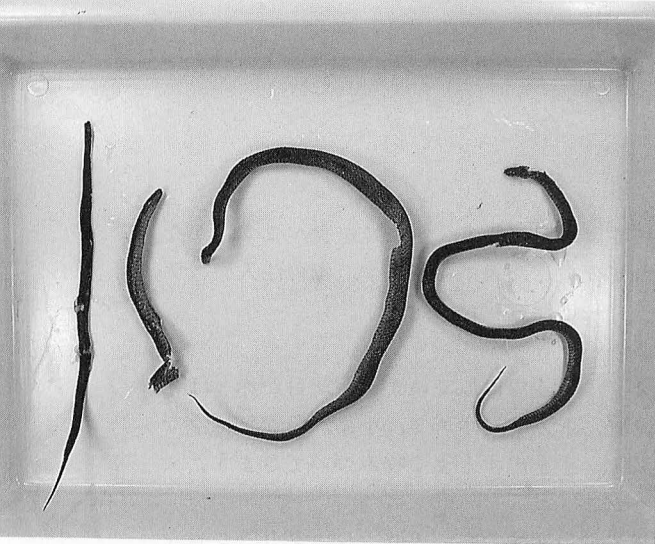


図1 タカチホヘビの取得地



スーパー林道で採取されたタカチホヘビ

## 蛇谷で見つかった タカチホヘビ

かつて、タカチホヘビは石川県内では2匹しか見つかっていませんでした。それぞれの採集地は鳥越村渡津と白峰村市ノ瀬で、両方とも約20年前の古い記録です。その後、県内では記録がありませんでした。ところが、1985年の8月に、白山自然保護センター中宮展示館近くの蛇谷に沿った白山スーパー林道上で美化清掃のアル

バイトをしていた筆者らによって4匹が死体で拾われたのです。8月12日に中宮レストハウス前で、8月14日に三ツ又発電所前で、さらに8月18日に白山自然保護センター中宮展示館付近で、そして8月20日には赤石(あかち)の滝付近でそれぞれ見つかりました。8月12日のものは上半身のみ見つかったので正確な大きさは判りませんが、全長(頭先から尾先までの長さ)40cm程度のものでしょう。8月14日のものは全長が18.5cmしかありませんでした。18日と20日のものは偶然にも全長は同じで、31.3cmでした。14日の1匹は車にひかれていましたが、他の3匹はただ干からびているだけでした。4匹とも道路の山側の端で見つかりました。タカチホヘビの死体が見つかった道の山側は主にミズナラ林で、標高は600m前後です。ちなみに蛇谷というのは、古来蛇が多いことから名付けられたようです。この一帯では、県内の蛇8種類は総て記録されています。タカチホヘビもある程度多く棲んでいるのではないのでしょうか。

タカチホヘビは小さく、半地中性で地味なことに加えて夜行性であり、普段はとても人目に触れ難いものです。ところが、夜地上で活動していて道路に迷い出て、そのまま戻れずに死んでしまうことがあります。こうした路上死体は、人目に触れ難い動物の生活を知る上で重要な手がかりとなります。分布する地域や活動季節が分かるし、どちらを向いて死んでいたかで移動の方向も分かります。蛙や小型サンショウウオの季節移動を調べるために、路上死体を集めて分析するという方法が広く用いられています。

表1 タカチホヘビの計測値

個体 番号	計測値 全長 (mm)	頭胴長 (mm)	尾長 (mm)	体鱗列数(列)					腹板 (枚)	尾下板 (枚)
				頸部	胴前部	頭胴中央	胴後部	肛門前		
1	*	*	*	23	23	*	*	*	*	*
2	185	154	31	25	23	23	23	23	152	47
3	313	245	68	25	23	23	23	21	147	55
4	313	265	48	*	23	23	23	23	156	44

\*計測不能

## なぜ集中して見つかったのか

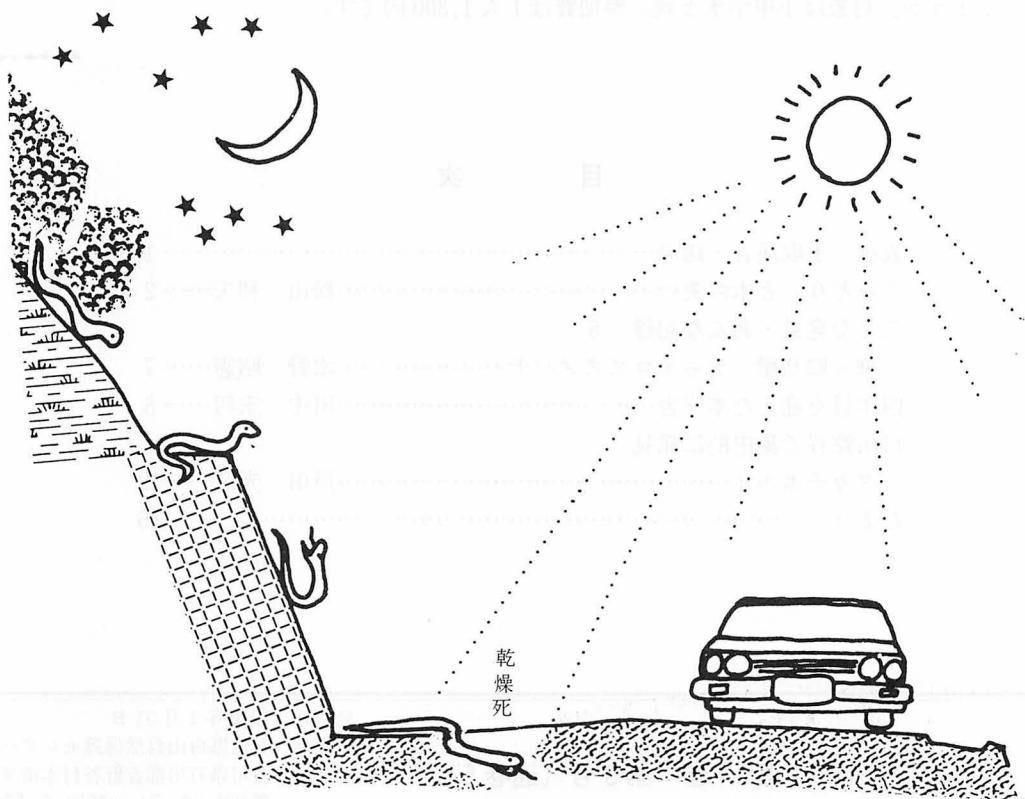
では、今まで石川県内でほとんど記録のなかったこの蛇が、短期間にしかも狭い地域に集中して見つかったのはどうしてでしょうか。

1985年の夏は例年と比べてあまり雨が降らず、8月には山の草もしおれ気味でした。そして、タカチホヘビが見つかった路上にミミズの乾燥した死体が数多く見られました。盛夏の渇水のため林床まで乾き、タカチホヘビが湿った所を捜して谷の方へ移動しているうちにスーパー林道に落ちてしまったことは十分考えられます。乾き切ったアスファルトの上では、この小さな蛇はそう長くは生きられないことでしょう。

白山スーパー林道はタカチホヘビの生活圏を分断しているわけですが、こういう山岳道路の犠牲になる小さな生き物は決して少なくありません。たぶん、市ノ瀬を通る県道白山線などでもタカチホヘビの死体を見つけることができるでしょう。

また、タカチホヘビの記録がこれまでほとんどなかったのは、小さな蛇が道端で死んでいても、あえて着目する人などほとんどいなかったからでしょう。自動車で通り過ぎればなおさらのことです。恐らくタカチホヘビは、白山麓には広く分布しているものと思われます。また、県内の白山麓以外、特に能登にいるかどうかは今後の課題です。皆さんも路上や山道で小さな蛇を見かけたら、注意して見て下さい。

(金沢大学理学部生物学教室)



## たより

昭和 60 年は、梅雨の豪雨、夏の日照り、11 月の降水日の多さ、そして例年より早い寒波と空のようすがいつもとちがった年でした。中宮展示館は 11 月 10 日で閉館し、今は深い雪の中で来年の開館を待っています。10 月以後は内部の改装工事のため大変御迷惑をおかけしました。

さて今号は、昭和 51 年まで当センターに在職された、国立民族学博物館の松山利夫さんが木の実の利用といわゆる雑木林の恩恵の多さについて寄稿して下さいました。センター在職当時から白山麓をはじめ全国各地の木の实の利用について調査研究をされ、法政大学出版会から「木の実」(ものとひとのシリーズ)の本を出されています。

タカチホヘビは、これまで県内でわずか 2 つの記録しかありませんでした。戸田光彦さんは今夏中宮展示館周辺の清掃のアルバイトをしているとき、道路上で干乾びた小さなヘビを見つけました。それがタカチホヘビでした。丹念にあたりを捜すと蛇谷に沿ったスーパー林道上で車に轢かれたり、干乾びたタカチホヘビがあと 3 匹も見つかったのです。

読者の皆さんの中にはもう気づかれた方も多いと思いますが、前号から写真、図表を多くしたレイアウトに改めました。少しでも読みやすい見やすいものにしようと思図したのですが、いかがだったでしょうか、御意見をお寄せ下さい。

冬の観察会を 3 月 8、9 日に開催いたします。毎年人気のあるブナオ山観察舎でのアニマル・ウォッチングです。昨年はニホンザル、カモシカのほかにイヌワシ、雪の中の小さな穴で休んでいるノウサギが観察されました。今年はどんな動物の姿がみつけれられるでしょうか。対象は小中学生と親。参加費は 1 人 1,300 円です。

## 目 次

表紙 手取溪谷・綿滝	1
「みどり」と木の実	松山 利夫 2
こんな発見・あんな記録 5	
乗っ取り屋 チャイロスズメバチ	水野 昭憲 7
四年目を迎えた本庁舎	田中 宏明 8
白山蛇谷で集中的に発見	
タカチホヘビ	戸田 光彦 12
たより	16

はくさん 第 14 巻 第 3 号 (通巻 57 号)

発行日 1986 年 1 月 31 日  
発行者 石川県白山自然保護センター  
石川県石川郡吉野谷村木滑ヌ 4  
〒 920-23 Tel 07619-5-5321  
印刷所 株式会社 橋本 確 文 堂